
黄昏の雨に濡れる仔猫のある意味を。

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の雨に濡れる仔猫のある意味を。

【Nコード】

N0498B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

いつもバスに乗り合わせる人の態度がその日は何故か違った。「俺、今日死ぬんですよ」そんなことを言ったのだった。

その日、いつも同じバスに乗り合わせる男の人の様子が、いつもと違った。

彼は無機質。いつも目をまっすぐにして、だけど何も映ってないように表情を変えたことがない。良い意味か悪い意味かわからないけどそれは普通ではなくて、ひんやり暖かいという感じでただバスに乗っている。

あたしはそんな彼をなんとなく見てしまう。彼が乗り込むと磁石みたいにぐいっとそっちに首が向く。彼はもちろん何も言わない。それがいつものパターンだった。

なのに、その日はそれがなかった。というかできなかった。雨だからいつも以上に混みあっているというのもあったけど、彼はバスに乗り込むと真っ先にあたしを見て、隣に座ってきたのだ。あまりにも近い彼との距離。さすがに彼を見つめるのは不自然だった。

バスの中は雨のザアとバスのキシキシが湿った空気に混ざって響いている。

居心地が悪いそんな空間にまず伸びてきたのは彼の声だった。

「俺、今日死ぬんですよ」

彼が口を開いたこと自体驚きを隠しきれないのに、彼の乾いた口と喉が織りなす振動はとんでもない言葉になってあたしの耳に舞い込んだ。

「え？」

思わず言ってしまう。たった一文字の感嘆も声が裏返った。混乱の果ての目眩に襲われそうになりつつも、どうにか顔をあげる。彼は、目尻の辺りが優しそうで意外に人間らしい表情だった。

そのお陰で今までのオーラは全くない。小柄な体型はむしろあたしのほうがちょっと優越感があるくらいだ。たぶん、彼の不思議な感じはそのギャップだったのだろう。

「たまに見るんですよね、予知夢。しかも必ず当たる」

「だけど、死期まで当たるなんて…」

「当たりますよ、必ず。だからこうしてあなたに話しかけた」

「あたしに…？それも予知してたの？」

「はい」

「…で、どうだった？最期の日は」

「ううん…、案外普通でした。雨が降ってたから傘さして、学校いって帰ってきて、今あなたと話をしてる。違うのは今だけですかね」

「学校の先生なの？」

「あ、はい。といっても教えてるのは美術だけです…」

「…なんか素敵だね」

「新任一年目。まだまだですよ」

「んー。そんなこと、ないと思うけど」

「わからないでしょう」

「わかるよ。いつも、バスで見てる。あなたの見つめる先にある夕陽」

「…黄昏は気持ちを落ち着かせて次の作品のヒントになるんですよ」

「そう。じゃあ、残念だね。こんな日に雨なんて…」

「あ、いや。名残惜しくはなりたくないし…」

「そっか…」

「あ、ごめん。こんな話ばかりで」

「ううん。あたしでよければいくらでも」

「ありがとう。…だけど少し話題を変えようか。なんだか笑いたい気分だ」

「じゃあ、そうだなあ。あたしは、十一月生まれの蠍座、O型、寅年なんだけどさ。この前有名な占い師に見てもらったら結婚は三十五歳を過ぎてからだって言われたんだよ。まだ十年も結婚できないの。それってどう思う？」

「すごい悲しい」

「だよ。しかも今ちょうど彼氏いないってのがリアルに効いたよ」

「：ごめん、笑えるよ」

「そっちは？」

「え？」

「彼女、或いは妻、はてまた浮気相手は？」

「全く。全然縁がなくなつてさ」

「じゃあ、あたしのこと笑えないじゃない」

「それも言えてる」

「あなた、ちよつと変な人ね」

「そう？」

「かなりね」

「酷いな」

「そう？」

「かなりね」

「ごめん」

そんな調子で、あたしと彼は互いに形は違うけどぴったりとはまるパズルみたいにいつの間にか笑いあっていた。いつも見てた彼のイメージとはちよつと違う気がしたけど、やっぱり根本にある彼はひんやり暖かくてあたしとしてはすごく安心できる人だった。名前も聞いていない仲だけど、小柄な彼を抱き締めたい衝動に駆られた。だけでもちろんそれはぐつと堪えて掴んでいた手摺から外へ逃がしていった。彼はそれには気づかず学校の話をしながらかけけらと笑っている。

そんな、彼の第一声は、未だにあたしの心の中に響いてる。今日死んでしまう。あり得ないようなことだけど、どういう訳か嘘に聞こえない。今だってあたしに笑顔を向けている彼には確かに血が流れてる。息をしている。生きている。死んでも何も不思議なことではない。ただ、そう考えてしまうとあまりに現実には怖いものを感じて、それが涙になって落ちてくる前に考えるのをやめた。

「ねえ、あなたは美術で何が得意？」

彼のことを知るため、そして自分の余計な考えをなくすためにそう

切り出した。

「彫刻とか、とにかく平面より立体が好きだな」

「そっか、よかった。あたし実はさ、陶芸教室で先生やってるんだ」
「そうだったんだ。芸術系の先生って俺たち意外に共通点があったんだな」

「うん、そうだね。あたし、一応美大でてるし」

「…じゃあさ、これわかるかな。俺の中学のときの美術の先生の口癖だった『芸術は一瞬で終わる』っていう言葉の意味」

「…：どういう意味だろう。あたしは芸術って、終わらないものだって思ってるからなあ…」

「俺も、初めはそう思ってた。時間があるのは製作の段階で、完成したものは殆んど時間の流れを受けないって」

「違うの？」

「うん。美術の先生になってから気づいたんだけどさ、作品って見る度に表情変えるんだよ。そのときの温度、湿度、明るさ、それから見る人の視力と感性。一秒も同じ条件なんてないんだよ」

「難しいね。だけどなんかわかる気もする。」

「だったら、きつといい先生になれるよ」

「ありがとう」

「…あ…」

あたしが笑うと、彼は窓の外をみた。ちょうど、彼が降りる一つ前のバス停に止まったときだった。彼の目線の先に雨に濡れた黒い道を、一匹の仔猫がよろよろと歩いているのが見える。辛そうに冷たくなった身体で一步一步進んでいく。限界は、確かに近い感じだった。

「俺、今日死ぬんですよ」

嫌な予感がしたときにはもう、彼はあたしの隣にいなかった。ここぞと言うばかりにバスから飛び出して仔猫のもとへ走っていた。もちろん、どこからかトラックの音がしている。

何もかもが一瞬で、何もかもがスローモーションだった。

—ありがとう。

ざわざわがバスに広がる。運転手さんは慌てて救急車を呼んでいるようだった。ある母親は子どもを抱きしめて、あるおばあさんは微動だにせずに風呂敷を抱えていた。そしてあたしは仔猫のいた道路を見つめて、そこにいる彼はもう、物体になっていた。名前を叫びたくてもわからない。それに声だってまともにだせる気がしない。立ち尽くして、ただ呆然と外を見ていた。

雨に流れる赤。暗い、雲に覆われた世界にそれだけがはっきりと映っている。雨は命の再燃を防ぐようにひたすら降り続けている。そんなことをしなくても彼が絶対に生き返らないことは恐らくあたしだけが知っている事実だ。

目の前で何もかもが崩れていった。初めに聞いていたことが実際に起きて、啞然とする間もなく彼は眠った。

それから暫くするとバスは、驚くほど静かになった。誰も何も話さないで、無心に自分の手やら足やらを見つめている。あたしは救急車が来て彼がいなくなってしまう前に、とよめきながらもバスを降った。外はちょうど雲のない部分に入ったらしく、雨が止んでいた。

水溜まりも気にせずに彼に近づく、ひんやりと冷たかった。確かに肌の感触なんだけど、人ではない。力も暖かさもなくなっている。そうして彼に触れると、やっと涙が溢れてきた。さっきまだあたしの隣で笑っていた人が、消えてしまった。ノートを破ったように、ある瞬間にそこにあるんだけどいない存在になってしまった。せつかく雲の間から黄昏の太陽が望んでいたのに、目を開けない。もう一度お礼を言いたくても耳には届かない。いつも、見ていた彼にもう会えない。

「にゃあん」

ふと、彼の傍らから仔猫が顔を出した。さっきとは違って仔猫は元氣そうに鳴いている。まるで彼の命が仔猫に移ってしまったみたいだった。大きな目に茜色の空とあたしが映っている。そうやって仔猫と見つめあうと底知れない後悔がかき消されてしまった気がした。今を受け止めるしかあたしに手はない。あたしは人を生き返らせたり、時間を戻したりなんてことはできないんだから。

大きな音を出してやってきた救急車は、彼をどこかへ運んでいった。同行するか尋ねられたが、あたしは首を横に振って行き先も聞かなかった。

赤いランプがくるくるしている。気がつけば街の向こうには大きな虹も。

あたしは彼を、見送りながら思った。

きつと彼が守ったのはきつと仔猫の命だけじゃない。この仔とあたしの背中を照らす黄昏の光とか、雨上がりの虹とか、涙の雫だとかとにかくいっぱいを残してくれた。

だけど彼の言う通り確かに芸術は一瞬のもので、曇と曇の間隙をすぎると虹は消え、涙と雨粒の区別もあやふやになった。あたしは濡れた地面に行く仔猫を抱き上げて傘もささずに帰路についた。

（後書き）

十あとがき十

みなさんは、自分、あるいは自分の大切な人がもし明日いなくなる
としたら一体何をしますか？ 本編には少し解釈に苦しむ部分もある
かもしれませんが、それはそんな『もしも…』を簡略化したと考
えていただければ幸いです。

それから、もし、本当にもしも、そんな別れの場面に出会ってし
まったときは一言、「楽しかったよ」と前向きな言葉をかけてあげ
てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0498b/>

黄昏の雨に濡れる仔猫のある意味を。

2010年10月8日15時09分発行